



「学ぶこと」とは

帝京大学小学校 校長 石井 卓之

いよいよ夏休みが始まります。今年度はコロナ感染症の影響で、できないことが多い1学期でした。これから始まる夏休みもまだまだ制限がありますが、是非有意義に過ごしてほしいと思います。

私は夏休みが大好きでした。でも、一つだけいやでいやで仕方がないことがありました。それは自由研究でした。「何を題材にすればよいのか」「どう進めればよいのか」「どうまとめればよいのか」、アイデアは浮かばないし考えることも面倒でした。「先生が課題を決めて、やり方を教えてくれればいいのに」と、毎年思っていました。そのため、夏休みの最後まで残っている宿題は自由研究でした。決められたことを行うのは得意でしたが、自分の頭で考えることは苦手でした。

2011年、新宿区の公立小学校で校長をしているとき、「学ぶこと」について考えさせられる出来事がありました。このときのことは、いつか子どもたちに改めて話したいと思います。

ミャンマーの山間部に住むカレン族のご家族が、戦争難民として日本に入国してきました。学区域の近くに難民支援を行う機関(センター)があり、地域の方がご自分の所有するマンションを借家として提供した関係で、私の勤務する小学校が協力することとなりました。それまで、ミャンマーという国名は知っていましたが、それ以外のことはほとんど知りませんでした。カレン族の子どもたちは、居住地が山間部にあり戦争が起きていたことなどから、自分の国では学校に通えていなかったそうです。もちろん、日本に来たこともありませんし、日本語を学ぶのも初めてです。

日本での生活の仕方や日本語指導は、保護者グループと子どもグループに分けてセンターで行われました。私は入国後2か月ほど経ってから、授業の様子を拝見するためにセンターに伺いました。保護者の方たちは慣れない日本語に悪戦苦闘していましたが、子どもたちは驚くほど上達が早く、表情もとても明るいことが印象的でした。これなら小学校に登校しても大丈夫そうだ、という実感がもてました。

小学校では、3名の子どもたちが学齢より少し下の学年に入ってもらい、3週間の学校生活が始まりました。まず感じたのは、「学校で勉強ができることが、楽しくて仕方がない。」という気持ちで、全身からあふれ出していることでした。よく漫画の一場面に、興味や関心があると「目がキラキラと輝き、星が出ている様子」が描かれますが、3名の子どもたちは、まさにその状態でした。教師の話の全てを理解できるわけではなくても、一言一句を聞き逃さないという気持ちが態度に現れていました。目が生き生きと輝き学べる喜びに浸っていることが、見ている私にも伝わってきました。1年生に入った児童は、センターの2か月間で平仮名をマスターし、学校に通いながらセンターでも勉強することで、3か月後には、カタカナも一部書けるようになりました。また、日常の会話も片言ですが、通じるようになりました。学びたいという意欲が努力を生むのだということを痛感しました。

日本では、明治5年に学制が発布され、それまで学校に通うことができなかった子どもたちに学びの機会が与えられました。当初、家業や子守のために学校に通うことができなかった子どもたちも、徐々に学校に通うことができるようになったそうです。学校に通い勉強できることが、当時の子どもたちにとっては大きな喜びだったといえます。しかし、現在の日本はどうでしょうか。勉強は強いられるもの、受け身なものとなっていないでしょうか。要因は一つではないと思いますが、「何のために学ぶのか」という目的意識と「学んだことがどう役立つのか」というゴールイメージがもてていないことは大きいと考えます。今後、AIの進化やグローバル化の進展により、現在の常識は大きく変化し、学びも変わることが推測されます。AIに任せる分野が増えても、創造的でクリエイティブな部分はより人間に求められていきます。

「学ぶこと」が好きな子どもが一人でも多くなるように、教師が学ぶ目的とゴールイメージをもたせ、チーム帝京小で取り組んでいきたいと考えています。